

たやうに寂れた工場町一帯

大正鉄工所因島工場の労働争議は会社側と争議団との最後の交渉が決裂した。会社側も労働者側も争闘以来既に二月を経て居るので今は唯根競べと意地競べで互に強がつて居る。会社側が労働者側の請求額の約百倍の賣入を投じて一隻の新造船並に修繕船を他の工場に廻航して工場閉鎖を反かし「無條件で妥協せよ」と迫れば争議団より各支部前に各地の労働団体又は労働者から送つて来た金品を麗々しく貼り出して「無条件で妥協は眞平だ工場閉鎖は覺悟の前である」と氣勢を揚げて居るので居中調停者は唯奔走に疲れて居る有様である。この巻添を喰つて毎月極まつて落ちて居た三十万円の金がピツタリと止まつた戸数三千人口一万四千の土生三庄ニヶ所村は火の消えた様を靜けさで老人も青年も争議の話で持切り工場町に全盛を誇つた料亭飲食店は殆ど全部戸を鎖し全く廃業同様である。更に市内の商家は工場町の常として概算りや月給日勤是となつてゐるけれども一月に亘つての争議の爲月給日

が来ても今更現金とは云へず大いにこぼして居る。その爲商店の打敷子はがた貯蓄く運轉資金が廻らぬのと争議の前途の見越がぬ爲新規に商品を生入れず賣切れるに委して居るので餅乾も商品箱も多くは空でホコリとツツに汚れて居てこのまゝ推移すれば多くの商店も戸を鎖すであらう。尚労働者の郵便貯金その他の貯蓄も豫想外に減つて居る。争議団幹部以外の職工は野球魚釣子供の守等をして餘裕餘裕たる所を見せて居る。

尾道市も飛沫をうけて大打撃。向井市長乗出す

備後因島の労働争議は五月十四日勅諭以来四十日に垂んとし全国的記録を作つておるが所在地土生町及三庄町の疲弊困憊は直接商取引を有し米麥穀類買金屑類其他煙草日用品に至るまですべの物資を因島に供給してをる尾道市が受くる影響と損害も多額に上り同月末の取引勅諭には双方商店間にデタラヒを生ずるものと見られ今から商取引を中止してをる向もある仕末に市當局としても對岸の火災視しておる譯にも行かず何れも調停案もがた